

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	西田 絵美（奈良県）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第16号
学位授与の日付	平成31年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学位論文題目	看護基礎教育におけるケアリングの教育
論文審査委員	主査 大西 正倫（佛教大学教授） 副査 山本 直美（佛教大学教授） 副査 渡邊 照美（佛教大学准教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は、以下に示すように、序章、第1章から第5章、終章の7つの章で構成される。

序章

第1章 現在の看護師養成教育における〈ケアリング〉

第2章 〈ケアリング〉の本質：〈ケアリング〉とは何か

第3章 看護における〈ケアリング〉

第4章 ケアリングの教育

第5章 看護基礎教育における〈ケアリングの教育〉カリキュラムへの提言

終章 まとめと課題

章ごとの概要については、西田絵美の提出物『博士学位請求論文要旨』にゆずる。

### 〔2〕審査結果の要旨

看護学は、いわば医学の隣に寄り添う形で存在し、自然科学系の学問と見なされる場合が多いように思われる。ところがケアリングを中核とする看護の営みそのものは自然科学に属するわけではない。では〈ケアリング〉をどのように捉えればよいのか。また〈ケアリングの教育〉はどのように行うべきか。これが、論者（本論文の執筆者）における初発の問いである。実はここに同時に〈ケアリング学〉の学問的性格の問題が伏在しているのであるが、これについては後述する。

まずもって特筆されるべきは、論者に見出される真摯な探究の態度である。本質的な問題を原理的に掘り下げ問い詰めていく思考態度に、独特のものがある。

例えば第1章の後半で日本国内の〈ケアリング〉概念の先行研究を広範に検討している

が、これは単に〈ケアリング〉の概念内容だけでなく、その〈捉え方〉の〈捉え返し〉までも目論んだもの、ケアリングの本来的な研究の方法や視角を見極めるために行ったものと受け止めることができる。

さて、この論文は直接に〈看護〉を論じたものではない。「看護基礎教育におけるケアリングの教育」という題目表記に明らかなように、〈教育〉がテーマである。教育学の論文であって看護学の論文ではない。ところでしかしこの「看護基礎教育」とは、単に看護にまつわるスキルやマニュアルの「基礎」を習得させるにとどまるものではない。そして〈ケアリングの教育〉は、その「看護基礎教育」の核心をなすのである。

「看護基礎教育」の中核に〈ケアリングの教育〉がなければならない。論者は〈ケアリングの教育〉をテーマとして打ち立て、教育学の術語連関・語彙体系を介して教育学の視野の中に位置づけようとした。その論述は、読者に対して教育学的思考を呼び起こす起爆剤としてのインパクトをもっている。

結論的に打ち出されてくるケアリング教育のあり方は〈現象学的教育〉である。

もう一方の結論として提示される「看護基礎教育におけるケアリングの教育」のカリキュラム〈試案〉（第5章）は、「ケアリング学」を基盤科目に置くことで看護基礎教育にケアリング概念を浸透させるという理念を明確にした点で、一定の評価ができる案である。

本論文の意図が間違いなく受け止められることを願って、ここでただちに個々の論述内容に関する論議にこれ以上踏み込むことは避け、一種メタレベルの観点から、学問論を少ししておきたい。

論者は、従来の〈ケアリング〉の捉え方の背後に「主客二元論的思考図式」が潜んでいるのを見た。この図式を転換させなければならない。それに対して論者自身は「自然科学や実証科学の視点」には立っていない。つまり、客観科学には立たない。したがって、主客二元論の枠組から自由な立場に立っている。このことの意義は大きい。それというのも、ケアリングの要諦の一つとして論者は、それが〈主体と主体〉の関係でなければならないことを挙げるが、物事を対象化し客観的に見る客観科学では、人間の〈主体〉のありようをつかむことができないからである。論者の物言いが自然科学・実証科学・客観科学の術語連関を外れるのは、そのゆえである。逆に言えば、自然科学・実証科学・客観科学の立場に立たないことは、ケアリングの本質をつかむための方略であると見ることもできる。論者がケアリングを規定する「人間性」や「品性」や「生き様」などの言辞は、実証科学・客観科学が対象として取り扱う〈その当体を客観的に特定できる実体的な概念〉（すなわち実体）としてではなく、一種の象徴として読まれなければならない。

そのような洞察と思索のなかで論者は〈現象学的教育〉に出会った。未だ十分に展開できてはいないが、〈ケアリングの教育〉を展開していく基本的な方向を指し示すことはできたと言ってよい。そして以上のように、ものの〈捉え方〉の奥底に潜む問題にまで掘り下げて検討を加えたところに本論文の特質を見出すことができる。

明示的に述べてはいないが、論者は、前例の少ない〈人文科学としてのケアリング学〉を提唱し、自身がその立場に立つことを、この論文を執筆することにおいて事実上宣明したものと受け止めることができる。〈人文科学としてのケアリング学〉、その具体例として自らを提示したところに本研究の意義を認めることができる。

以上の学問論は、博士学位請求論文としての〈審査〉の観点にもかかわる。

この論文は実証科学ではない。したがって、到達目標への到達度を以てその成果を確定するというわけにはいかない。むしろ方向目標（本論文に即してその例を挙げるならば、真摯な思考態度や本質直観的な深い洞察）にかかわる作品としての観点から審査されるべきである。論文の内容面もさることながら、〈ケアリングの教育〉というテーマおよび〈人文科学としてのケアリング学〉という分野を提起したこと自体に意義を認め、そのこと自体を評価したい。

よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断する。

なお、〈人文科学としてのケアリング学〉に立脚した〈現象学的教育〉、これの具体化が待たれる。